

さかなかな

2025 秋

Vol.127



特集

特別展

南極観測隊と南極観測船

- 水族館トピックス
- 水族館アカデミー ダーウィンの箱
- ほねほね探検隊
- ボランティア便り
私の館内おすすめポイント
- 水族館スクールレポート
- アクアリウム・ダイアリー

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS

名古屋港水族館

南極観測隊と南極観測船

名古屋港水族館

この夏、名古屋港水族館では特別展「南極観測隊と南極観測船」を開催しています。今回の特別展は、水族館だけでなく、名古屋港ポートビルと南極観測船ふじも会場となる合同特別展となっています。

名古屋港水族館では、サブテーマを「～『ふじ』で行く南極への旅～」として特別展を開催しています。ここでは、現役時代の「ふじ」の活躍や南極観測の様子、そして観測船によって採集された南極の生き物たちを、映像や実物展示を通じてご紹介しています。

海洋生物研究センター 松田 乾



南極観測船「ふじ」の活躍と退役後

南館2階エントランスホールでは、「ふじ」が現役時代に果たした役割や、日本の南極観測で得られた成果を展示。南極航海で経験した最大の揺れ（傾斜角度45度）の再現模型、第7次南極地域観測隊（第7次隊）に同行したマスコットぬいぐるみ「富士昭男」「富士和江」のレプリカも並びます。当時の南極航海映像も上映され、乗組員の視点で「ふじ」の任務を体験できます。

さらに、「ふじ」が役目を終えて名古屋港に係留されるまでの経緯や、その存在がきっかけとなり南館の展示テーマが「南極への旅」となった背景も紹介しています。



最大傾斜角

南極観測船が南極海に向かう途中に遭遇する暴風圏を通過するとき、大波によって船は大きく揺れます。ここでは「ふじ」が現役時代に経験した最大傾斜45°を再現しています。ここで展示している椅子は実際に「ふじ」で使用していたものです。



「富士昭男」「富士和江」

「ふじ」が初めて南極へ行くにあたり、「富士昭男」「富士和江」というマスコットキャラクターが作られ、乗船しました。ここでは当時と同じ大きさのぬいぐるみを再現しています。記念撮影もできます。

3階

「南極の海」

観測船と生き物たち

南館3階「南極の海」では、日本の南極観測船の比較や、現役南極観測船「しらせ(2代目)」での観測、東京海洋大学練習船「海鷹丸」による南極海洋観測、さらにオーストラリアの南極観測船も紹介しています。

専用水槽では、「しらせ」やオーストラリアの南極観測船で採集された南極の生物を展示。実際に南極海で暮らす生き物たちを間近で観察できる貴重な機会です。

第65次隊の成果：日本初展示の生物



メガネト

第65次隊で初めて生きた状態で日本に持ち帰られました。近年の研究では、南極海の低緯度域に生息するメガネト *Lepidonotothen kempii* はウロコノト *L.squamifrons* のシノニム（同物異名：同種ということ）とされていますが、展示個体が捕獲された高緯度域（リュツォホルム湾）については、研究が不十分であることから、ここでは従来通りメガネト *L.kempii* を採用しています。

2023～2024年の第65次隊では、「しらせ」による底生生物調査が行われました。ROV（Remotely Operated Vehicle：遠隔操縦無人潜水艇）による海底観察・録画や、ビームトロール（ビームという棒で網口を開く方式の底曳き網）による底生生物採集を実施。その際に生きたまま採集された魚メガネトとウミグモ類ユメムシの一種は、日本の水族館で初めて生体展示されています。

オーストラリア観測船「ヌイーナ」とナンキョクオキアミ

名古屋港水族館は1992年の開館以来、オーストラリア南極局とナンキョクオキアミの飼育で協力関係を続けています。

この特別展では、オーストラリアの新しい南極観測船「ヌイーナ」(Nuyina。タスマニア先住民族パラワ・カニ語で「南極の光＝オーロラ」を意味)で採集されたナンキョクオキアミも展示しています。「ヌイーナ」には、船体の採水口からプランクトンを海水ごと採取する装置(Wet well)が備えられており、この装置で採取された個体が良好な状態で水族館に搬入されました。生きたナンキョクオキアミを一般公開しているのは、世界でも名古屋港水族館だけです。



ヌイーナ

2021年に就航したオーストラリアの南極観測船です。Wet wellというプランクトンを採取する画期的な装置を備えています。



ナンキョクオキアミ

ヌイーナのWet wellを用いて採集されたとても状態の良いナンキョクオキアミを展示しています。

南極観測船ふじ

南極観測船ふじ開館40周年記念事業

特別展「南極観測隊と南極観測船」

～1万4,000kmの旅路と5ヶ月間の船内生活～を開催中



常設展示では見る事のできない展示の一例。「ふじ」が氷に閉じこめられたときの気持ちを歌にしたレコード「ピセット何のその」(手前)と、南極工芸展出品作品(奥)。



第64次南極地域観測隊として参加した南極観測船ふじ学芸員が入手した記念品をエピソードとともに紹介。

現在、南極観測船ふじと名古屋港水族館では、南極観測隊と南極観測船に焦点を当てた同一テーマの特別展を開催中です。「ふじ」では、サブタイトルは「～1万4,000kmの旅路と5ヶ月間の船内生活～」として、歴代の南極観測船の紹介や、日本と南極を往復する間の船内での観測活動、生活などについて、「ふじ」の時代を中心に、パネルや実物資料の展示を行っています。会場は南極観測船ふじ、名古屋港ポートビル(1階・ロビー、3階・名古屋海洋博物館、7階・展望室)にあり、南極観測船ふじ会場では歴代の南極観測船などを、名古屋海洋博物館会場では「ふじ」の時代は南極観測が国民の注目の的であったことをうかがわせる品々を、名古屋港ポートビル展望室会場では南極観測隊の記念品や思い出の品などをそれぞれ紹介しています。常設展示では見る事のできない收藏品や写真、初代南極観測船「宗谷」や3代目南極観測船「しらせ(現：SHIRASE5002)」から借用した展示物などが見所です。

南極観測船ふじ学芸員 山口 真一

南極は私たち人間の生活圏から遠く離れているため、地球規模の環境変化を知るうえで最も適した場所のひとつといえます。名古屋海洋博物館や「ふじ」での展示とあわせて巡ることで、南極観測船と南極の魅力をより立体的に感じていただけます。

季節展「夏空」を開催しました

あなたのイメージする「夏空」はどんな空ですか？今にも雷の鳴りそうな積乱雲がある空、雲ひとつない真っ青な空、どこか寂しさを感じる夏の終わりの夏空…。

今回の季節展は、蒸し暑い風と共にセミの鳴き声が聞こえてくるような「夏空」をテーマとし、ソラスズメダイを展示しました。

ソラスズメダイは名前の通り、空色で綺麗な魚ですが、寝たり、驚いたり、危険を感じた時は、やや黒っぽく体の色を変化させます。その様子もまた、天候が変わりやすい夕立前の夏空のようでした。

ソラスズメダイの青い体色が際立つように青い照明で水槽を照らす工夫をしたほか、水槽の中には造花のヒマワリをレイアウトしたり、水槽の周辺には麦わら帽子や虫取り網を飾ることによって夏のイメージを演出しました。多くのお客様に夏を感じていただけたと思います。

※都合により一部の期間は「インドヨウソラスズメダイ」を展示しました。



「夏空」をイメージした水槽の様子と「ソラスズメダイ」

■ 飼育展示第一課 松本 智美

ミュージアムグッズを企画するワークショップを開催しました

8月18、21日の二日間、ミュージアムグッズを企画開発するワークショップを開催しました。これまでも当館で様々なワークショップを開催している金城学院大学との共催で、同大学および高校の学生たちが参加し、水族館のミュージアムショップで販売できるような商品を考えて発表するという内容です。

初日は、同大学岩崎教授の講義や、水族館の概要説明、当館ショップスタッフによる実際の商品開発の話などに続き、ガイドツアーで館内を見学。グループごとにどの生き物をモチーフにするかなどが話し合われました。二日目は自分たちのアイデアを形にする作業です。様々な素材を使って「こんな商品を作りたい」を形にしていきます。最後に、グループごとに発表された商品は、日用品や玩具など実に様々で、どれも生き物や水族館の魅力を十分に伝えることができる素晴らしいものばかり。商品ごとにテーマや購買層、予定価格など、細かい内容も含めてプレゼンされました。

今回の企画案は、今後、実際に商品化できそうかなどの検討がなされます。将来、学生たちのアイデアが活かされた新商品がショップで販売されることになるかもしれません。



ガイドツアーで生態や水槽の工夫を知りアイデアに活かします



様々なアイデアが生まれたグッズ案ができました

■ 学習交流課 加藤 浩司

水族館トピックス

2025 秋

シャチの「アース」が急死しました



在りし日のアース

アースは2008年10月13日に鴨川シーワールド(千葉県)で誕生し、2015年に名古屋港水族館に来館しました。体長6.0m、体重3.7トンにまで成長したアースは体の大きさだけでなく、存在感もとても大きなものがありました。水中で見せる雄大な姿、トレーニングで見せる迫力のある姿、おだやかな性格が作り出すゆったりした雰囲気。そのどれもが私たちを魅了し、水族館で一番の人気者と推す声も多くいただいていたました。

そのアースが8月3日に急死しました。岐阜大学病態解析・診断学研究室 村上麻美准教授、食品環境衛生学研究室 猪島康雄教授による病理解剖の結果、直接の死因は腸ねん転でした。アースの死亡後に

設置した献花台には2,000件以上の花や1,000件以上の手紙、写真、イラストなどが寄せられ、アースが本当に多くの方に愛されていたことをあらためて実感しました。アースがみなさんの心に残り続けることを願うとともに、これまでアースを応援して下さったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

■ 飼育展示第二課 神田 幸司

水族館deモーニングを開催しました!!

令和4年度から開催している「水族館deモーニング」も、おかげさまで今年で4年目を迎えました。例年ご好評をいただいている本企画は、今年度は7月26日と8月2日の2日間にわたって開催し、チケットは販売開始と同時に完売するほどの人気ぶりとなりました。

当日は、開館前の午前7時から貸切状態の館内をゆったりとご見学いただきました。普段はご覧いただけない開館前の準備作業の様子が公開され、さらに飼育員による特別解説も実施されました。

さらに、南館フードテラス「トータス」では、ビタパンサンドやサラダに加え、名古屋名物をアレンジした「ミニチュア小倉トースト」を添えた特別モーニングメニューをご提供。ご参加の記念として、イルカがデザインされたオリジナル缶バッジもお渡ししました。

参加者の皆様からは、「普段聞けない飼育員の話が聞けてよかった」「モーニングがおしゃれで美味しかった」「とても楽しい時間を過ごせた」といった嬉しいご感想をいただきました。本企画が、皆様の夏の思い出のひとつとなりましたら幸いです。



お客様からご好評いただいたモーニングセット

■ 営業企画課 鈴木 敏文



アカウミガメの生息域に見られた変化

飼育展示第一課 森 昌範

● アカウミガメの回遊生態に迫る

名古屋港水族館では1992年の開館以来、絶滅の危機に瀕しているウミガメ類の保全を目的とした調査や研究に取り組んでいます。

それらの中でも特に大きな取り組みと言えるのが北太平洋におけるアカウミガメの回遊経路に関する調査です。この調査は当館で育てた幼いアカウミガメ(合計約200頭)の甲羅に位置情報を発信する送信機を取り付けて放流し、その後の回遊を人工衛星で追跡するというもので、1997~2024年にかけて海外の研究機関と共同で行ってきました。

足掛け27年にも渡って取り組んできた調査によって、海水温の上昇の影響を受けて幼いアカウミガメの生息域が変化してきていることが分かってきました。



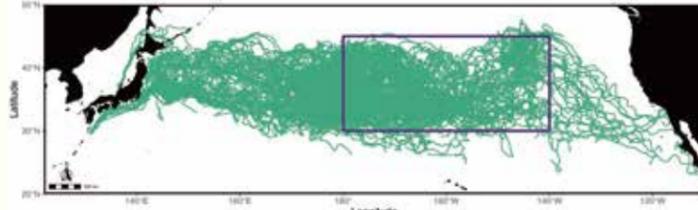
外洋の船上から甲羅に送信機を取り付けたアカウミガメ(2歳齢)を放流する様子

放流されたアカウミガメ

● 27年間に蓄積したデータを解析する

北太平洋の北緯40度付近で東西に帯状に広がる海域は北太平洋移行帯(NPTZ)と呼ばれています。ここは北方の亜寒帯循環と南方の亜熱帯循環との境界となる所で、それぞれが混じり合う栄養豊かな海域となることからプランクトンが大量に発生する生産性の高い場所です。これまでの調査によって幼いアカウミガメは餌が豊富に存在するこの海域を生息域として利用していることが分かっています。

私たちの研究グループは、NPTZの過去27年間のウミガメの衛星追跡データ、表面海水温データ、クロロフィルa(植物プランクトン)濃度の観測データなどを組み合わせた解析を行うことで、気候変動に伴うアカウミガメの生息域の変化を調査しました。



1997~2024年に放流した約200頭の幼いアカウミガメの衛星追跡データ(緑線)と北太平洋移行帯(NPTZ)の研究対象区域(紫線) Briscoe et al.(2025) Frontiers in Marine Science

● データ解析で見えてきたこと

その結果、過去27年間でNPTZの表面海水温は1.6℃上昇し、クロロフィルa濃度は19%減少したことが分かりました。これはNPTZの生産性の低下を示す貧栄養化ともいえる現象で、それに伴って幼いアカウミガメの生息域が北へ約550kmもシフトしていたのです。(東京から青森までの直線距離約570km)

この研究成果からは短期的にはアカウミガメが急速な海洋環境の変化に適応する能力があると言える一方、長期的な影響を考察することができません。アカウミガメの生息域の変化について長期的な影響を調べるためにも、まだまだ放流調査を続ける必要があります。

ほわほわ探検隊

クロマグロの頭骨の特徴

クロマグロの頭骨には松果体孔と呼ばれる細長い隙間があり、半透明の皮膚と軟骨に覆われています。この孔を通じて光が松果体に届くことで、体内時計や日周期の調節に関わるホルモンを分泌します。黒潮大水槽前では、当館で全長150cmまで成長した個体の骨格標本を展示中です。

是非、この標本で松果体孔を観察してみてください。

飼育展示第一課 岡本 仁



ボランティア便り 私の館内おすすめポイント Volunteer News

南館3階 「南極コーナー」

ボランティア 白幡 真理子

ペンギン水槽手前の広い場所。ただの通路ではありません。床を見ると普段あまり目にしない南極の地図が描かれており、南極点やペンギン営巣地、昭和基地などの位置を知ることが



スロープの壁面にミンククジラの解説が!

ことができます。

私の推しはここでの想像力。地図の上に立つと辺りは壮大な氷原。クジラがナンキョクオキアミを大量にひと呑み。氷の下にはコーナーに展示している魚たち。極寒に適応して生きている生物に思いを馳せることができます。

ほら!もう少し進むとペンギンたちが待っていますよ。



南極コーナーでは現在特別展を開催中です

水族館スクールレポート School Report

「南極・昭和基地ライブトーク!」を開催しました 海洋生物研究センター 松田 乾

7月26日(土)、名古屋港水族館南館2階のシネマ館にて「南極・昭和基地ライブトーク!」を開催しました。例年は「南極観測船ふじ」内の食堂で実施してきましたが、今回は「南極観測船ふじ」開館40周年を記念した特別イベントとして、より多くの来場者にご参加いただけるよう会場を水族館に変更。事前申込74名、当日参加27名の計101名が来場しました。

イベントでは、南極・昭和基地と全国4か所の博物館を中継で結び、第66次南極地域観測隊越冬隊が現地での活動や生活をライブで紹介しました。事前に選ばれた参加者3



昭和基地との生中継を行いました

名が昭和基地の隊員に直接

質問する場面もあり、臨場感あふれる内容となりました。中継後のトークセッションでは、第64次隊員で南極観測船ふじの学芸員を務める山口と、第65次隊員で水族館の飼育係である松田が登壇。参加者から寄せられた質問にできる限り答えながら、南極での体験や裏話を交え、会場は大いに盛り上がりました。

また、サテライト会場として使用された「ふじ」食堂でも中継映像が上映され、立ち止まって見入る来場者の姿が多く見られました。アンケート結果からは高い満足度がうかがえ、イベントは好評のうちに幕を閉じました。



トークセッションでは来場者からの質問に南極でのエピソードを交えてお答えしました

アクアリウム・ダイアリー

2025年6月～2025年8月

催し物

- 7月19日～ 特別展「南極観測隊と南極観測船
～『ふじ』で行く南極への旅～」開催
- 7月22日～ 季節展「夏空」ソラスズメダイ展示
- 7月22日～8月31日 夜間営業、ナイトパフォーマンス開催
- 7月26日,8月 2日 水族館deモーニング開催

【水族館スクール“もっと知りたい!ダーウィン教室”】

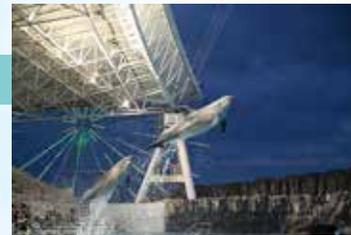
6月15日 「知ればもっと好きになる!?ペンギンあれこれ」
参加者 4組12名

【水族館スクール“君もドリトル先生になれるか!”】

- | | | |
|-------|---------|-----------|
| 7月23日 | イルカ | 参加者20組55名 |
| 7月27日 | 飼育係のお仕事 | 参加者19組56名 |
| 7月30日 | 黒潮大水槽 | 参加者18組50名 |
| 8月 3日 | ペンギン | 参加者19組58名 |
| 8月 6日 | 飼育係のお仕事 | 参加者18組47名 |
| 8月20日 | 飼育係のお仕事 | 参加者18組53名 |
| 8月24日 | ウミガメ | 参加者15組53名 |
| 8月27日 | ベルーガ | 参加者17組46名 |

生物の出来事

- 6月28日 今シーズン初めてのアカウミガメ這い出し21頭
- 8月 3日 シャチ「アース」死亡(8/3～17 献花台設置)
- 7月 8日 北太平洋公海上にてアカウミガメ28頭(2歳齢)追跡調査のため放流
- 8月 2日,8月 3日 あかばね塾主催「エコ・オリエンテーリングin赤羽根」にて子ガメ放流



ナイトパフォーマンス

来訪者

- 6月 3日 シーライフ名古屋 小川泰史館長、森 徹キュレーター
- 7月30日 JERA 執行委員 園田光一様 他3名
- 8月 6日 名鉄インプレス 川本晃平常務取締役、齊藤敬一郎部長
- 8月18日,8月21日 金城学院大学 岩崎公弥子教授 他6名

講演・その他出来事

【講演など】

- 6月 7日～ 8日 日本セトロロジー研究会勇魚会合同大会
(講演:神田幸司、発表:大島由貴)
- 6月11日～12日 中部ブロック獣医師研究会
(参加:神尾高志)
- 6月13日 「海とさかな」コンクールオンライン授業
(講師:栗田正徳、加藤浩司)
- 6月26日～27日 近畿ブロック水族館飼育係研修会
(発表:宮嶋桃子)
- 7月 8日～ 9日 JAZA生物多様性委員会鯨類共同計画推進会議、
イルカ類新生児育成のための人為介入ワークショップ
(発表:神田幸司、参加:阿久根雄一郎、神尾高志)
- 7月10日 京都大学野生動物研究センター
オンライン対談(神田幸司)

【講師派遣】

- 6月14日 愛知万博20周年記念事業「愛・地球博20祭」
- 7月 4日 名古屋市青年大学鯨城学園
- 7月11日 名城大学博物館学講義
- 7月20日 一宮地域文化広場
- 8月 5日 熱田神宮緑陰教室
- 8月13日 名古屋市下水道科学館

【職場訪問・レクチャー】

22件 918名

【職場体験】

4件 11名



編集後記

今年度から「さかなかな」編集委員に仲間入りしました。実は1992年の開館準備号vol.1で紹介されたことのある古株ですが、まだまだ気持ちはフレッシュなつもりです!ベテランの味を活かしつつ、新しい目線で名古屋港水族館の魅力をより多くの方にお届けできたらと思います。開館33年のネタを掘り起こしながら、皆さまに楽しんでいただける誌面づくりを目指して頑張ります!(稲越)

表紙写真 メガネト【*Lepidonotothen kempfi*】

南極大陸の沿岸、水深100～900mの海底に生息します。目の下にメガネのつるのような模様があるのが名前の由来で、目の上のアイシャドーのような模様特徴です。

ニュースレター さかなかな Vol.127 2025年 秋
発行/公益財団法人 名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館
〒455-0033 名古屋市港区港町1番3号 TEL.052-654-7080
URL <https://nagoyaaqua.jp>
本誌の掲載記事、写真等の無断複写・複製転載を禁じます。

WEBサイト
<https://nagoyaaqua.jp>
(なお、一部の機種でご覧いただけない場合があります)

